

中国雲貴高原の「高坡ミャオ」族の生活（Ⅰ）

——貴州省・從江県加勉郷別鳩村の場合——

THE LIFE OF THE UPPER MIAO TRIBE IN CHINA UNKWEI PLATEAU(Ⅰ)

田畑 久夫*

TABATA Hisao

This paper focuses on the study of the Miao tribe's life, which lives in the mountains and traditionally puts shifting cultivation and hunting into practice. That is, according to grasp their traditional culture. For, Japanese and the upper Miao tribe live together under the same natural environment. So, I selected one of the typical Miao's settlement and studied their traditional lifestyle in detail.

1. 問題の所在

ミャオ族は、西南中国に居住する典型的な山棲みの少数民族である¹⁾。この集団の居住地域は、西南中国を代表する高原である雲貴高原を中心に、はるか国境を越えてインドシナ半島北部の山岳地帯にまで分布地域を拡大している²⁾。かように、広範囲に展開するミャオ族は、ほぼ同地域に幅広く居住するヤオ族とともに、わが国の研究者間においては、西南中国に分布する少数民族の中でも、とくに従来より多大の関心がもたれてきた民族集団である³⁾。かかる理由は多々存在するが、わが国の伝統文化の形成に関する基盤あるいは根底となったと看做されている基層文化(Basic Culture)の源流の有力地域の1つにこれらの民族集団が居住しているから

である⁴⁾。つまり、ミャオ族・ヤオ族などの山棲みの少数民族の詳細な生活や習慣に関する現状分析を通して、日本文化の基層文化を探ろうとするものである。

かかる観点を敷衍するならば、両民族集団に代表される少数民族の生活や習慣は、細部については若干異なる点が存在するものの、大局的にはわが国の伝統的な生活や習慣と類似していると考えられる。それ故、彼らの生活、習慣などの伝統文化に関する現状分析から、主として明治維新後における欧米の文化の導入によって急速な近代化の道をめざし、とくに第2次世界大戦後の1960年代にはじまった高度経済成長期以降の急速な近代化の結果、消失してしまったわが国の伝統文化の復元や類推の手がかりが得

*昭和女子大学文学部日本文化史学科助教授

Assoc. Prof., Dept. of History of Japanese Culture, Faculty of Letters, Showa Women's Univ.

られるからと看做されるためである。

かような研究方法は、わが国では民俗学などで主として実施されている立場、すなわち現在における生活や習慣の中から伝統的なものを抽出し、その歴史を探ろうとするものである。このような研究方法が可能となるのは、ミャオ族・ヤオ族などの山棲みの少数民族の生活空間が日本文化の形成の中心となったと考えられる西南日本の植生に代表される自然環境と類似しているからである。すなわち、ほぼ同様の自然環境下においては、そこに居住する民族集団が異なっても、同様の文化が発生したり伝播すると思われるからである。後者の場合、勿論文化自体伝播することが不可能であるため、文化を担う集団の移動も充分であったと推定できる。かかる点は、日本民族のルーツに関する非常に興味ある論点であると思われる。しかし、この点については詳細な議論が必要と考えられる。稿を改めて論じることにはしたい。

本稿においては、以上簡単に指摘した視角を踏襲しつつ、論を展開していくことにする。ただし、この点に関しても、既発表の著作・拙論⁵⁾などで度々論じてきたので、本稿では簡単に述べるにとどめるが、以下の点はとくに記しておきたい。

すなわち、本稿の分析視角の中心としては、人々の生活の基本条件の1つである生業形態を主体とした生業関係を検討していくことにする。生業形態に代表される生産形態などの、いわゆる「物質文化」を主要な論点とするのは以下のような理由による。すなわち、ミャオ族・ヤオ族などに関する山棲みの少数民族が居住する生活空間は、両民族の主要な居住地域である西南中国においては、外国人が自由に立ち入ることが禁止されている「未開放地区」に指定されてきた⁶⁾。そのため、従来からは例えば竹村卓二の先駆的なヤオ族に関する研究業績⁷⁾に代

表されるように、漢籍史料からの文献研究が中心となっており、field surveyに基づいた実証的な調査・研究が非常に少なかったといえる。中国人研究者の場合も同様で、とりわけ地元における研究者にもこの点が該当する。つまり、かかる点は、長期間のfield surveyに基づいた研究書あるいは報告書が皆無であることから推定できる。かような意味からも、本稿は短期間ではあるが調査対象地域に定着したfield surveyを基盤とした数少ない事例研究といえよう。

ただし、「物質文化」を主体とする調査・研究は「image」(象徴)に代表される「精神文化」がfield surveyの中心となりつつある現在の文化人類学(民族学)・人文地理学などのいわゆる野外科学の研究動向とは若干異なるかも知れない。しかしながら、生業形態に代表される「物質文化」をまったく把握していない「精神文化」の調査・研究は、場合によってはすべてまでとはいわないまでも、研究者の空理・空論に陥いる恐れが十分に想定できる。かような観点から、本稿においては生業形態に代表される生産関係の実証分析を重視し、論を展開していくことにする。

2. ミャオ族の概要

前項で指摘したように、ミャオ族は、ヤオ族とならんで西南中国ではとくに分布が広範囲にわたっている。とりわけ、ミャオ族がインドシナ半島北部にまでその居住地域を拡大するに至ったのは、以下に述べるように漢民族との抗争の結果であるといわれている。例えば、1666年に清王朝がミャオ族に対して直接統治を行なうことを決定し、王朝に服従しないミャオ族に対して、数年間にも及ぶ徹底した討伐を実施した。そのため、一部のミャオ族は、かような弾圧を避けるために、国境を越えて南下せざるを得なかったのである。

以上のような原因などにより、ミャオ族は国境を越えて広範囲に分布することになった。それ故、自称に関しても、国や地方などによって異なっている⁹⁾。このように、ミャオ族といっても、種々の分派が存在するのである。しかしながら、現時点では、例えば、ほぼ同じ地域に広範囲に分布・居住するヤオ族のように、科学的な基準でもって種々の分派を分類するまでには至っていない¹⁰⁾。すなわち、伝統的には、女性が着用している衣装による視覚的な分類が主体であった¹¹⁾。近年になって、ようやく方言を中心とした分類が行なわれるようになったという状態である。その代表的なものが第1図である。しかしながら、第1図にみられる分類の精度は高くないように思われる。例えば、図中で黔東南方言・南部土語に区分されている地域の中にも、異なる服装をし、違った言葉を話す集団も存在したり、その一部は、黔東南方言・北部土語や東部土語と区分されている地域にも居住していることなどが指摘できる。それ故、第1図は再考する余地が充分あるといえる。かか

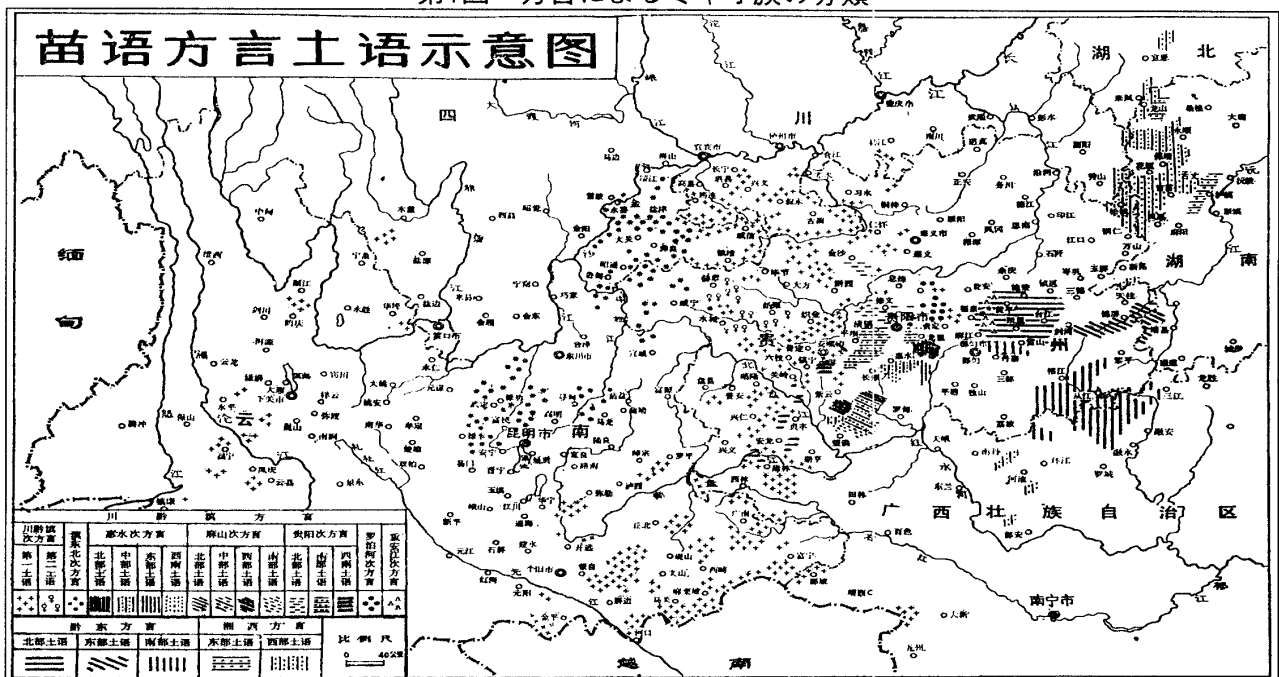
る理由は、ミャオ族の主要居住地域が山岳地帯を中心とする、いわゆる辺境の地に多いことなどから、実際に研究者がfield surveyを実施していないことに起因していると推察できる¹²⁾。

以上論じたように、各集団の分類など基本的な作業は非常に遅れている。そこで本稿では、各集団が居住している生存基盤に注目して、分類を行なうことにした¹³⁾。というのは、各集団の生活空間の海拔高度差の相違によって区分すれば、同じミャオ族の中でも生業形態に差がみられることが判明したのである。

すなわち、ミャオ族の集落は、家屋が1ヶ所に密集するという集村形態をとる。しかも、集落規模は付近の少数民族の集落と比較すれば大規模で、戸数が100戸あるいはそれ以上に達する集落も存在する。このような外見上の特色を有するミャオ族の集落に関して、2通りのタイプが存在する。

第1のタイプは、河谷や現地で「壩子」と称されている山間小盆地を中心に、主として水田稲作に従事する集団によって形成されたもので

第1図 方言によるミャオ族の分類



〔出典〕王輔世主編 (1985)『苗語簡志 (中国少数民族語言簡志叢書)』民族出版社 付図より

ある。第2のタイプは、トウモロコシやアワ・ヒエなどの雑穀、タロイモなどのイモ類、陸稻（モチ種）などを、主として山腹斜面や山頂まで達する棚田、または周辺山中に散在する焼畑において栽培している集団である。前者は、集落・耕地などの生活空間を海拔高度500～700メートルの比較的低所、後者は海拔高度800～1100メートルの比較的高所にそれぞれ居住している。

このように、同じミャオ族に所属していても、居住している生活空間が異なるため、生業形態に代表される生活様式も微妙に相違している。本稿では、第1のタイプは、河谷・「壩子」などの小規模な平坦地を主たる生活空間としているため「平地ミャオ」族、第2のタイプは、従来から焼畑農業を主体に農業を営んできたためか、山腹斜面上か山頂付近に集落を形成する傾向がみられるので「高坡ミャオ」族と称することにする¹⁴⁾。

すなわち、両ミャオ族は、ともに山間部に居住して焼畑農業を伝統的に行なっていたことは共通している。しかし現在では、「平地ミャオ」族は、河川水を利用する水田稲作、「高坡ミャオ」族は、天水利用による棚田での水稻栽培や従来からの焼畑農業を継承するというように、農業を主体とする生業形態にも相違がみられ

る。本稿でとりあげるミャオ族は、第2タイプすなわち「高坡ミャオ」族の集落である。

3. 別鳩村の生活

1) 集落の概要

調査研究対象集落の正式名称は、貴州省黔东南苗族 族自治州從江县加勉鄉別鳩村である¹⁵⁾。住民は全員ミャオ族¹⁶⁾で、戸数123戸、人口は451人である（1995年）。村は、それぞれ名称が付けられている5組から構成されている（第1表）。しかしながら、このような組は、人民共和国成立後に行政上の必要などにより便宜的に区画されたものと思われる¹⁷⁾。というのは、第1表にみられるように、第1組党革と第2組、歹外は共同で同じ湧水（井戸と称している）である「ウーロン」を使用している。それ故、両組は元来分離していなかったものと推定できる。同様に第3組羊岡に関しても、現在では住民の半数が「ウーロン」を、他の住民は「ケージユ」と呼ばれている別の湧水を利用している。しかし、「ケージユ」は、「ウーロン」と同一の水系の上位に位置する湧水である点などから、第3組も合わせて本来1つの集落であったのではないかと考えられる。実際、これら3組は隣接しており、境界が分らないほどである。つまり、別鳩村は5組に分割されているが、

第1表 別鳩村の組

組	名称	戸数	人口	使用する湧水
1	党革 ダンケ (dag ge)	25 ^(戸)	90 ^(人)	烏龍 ウーロン (wu long)
2	歹外 ダイワイ (daiwai)	20	92	烏龍 ウーロン (wu long)
3	羊岡 ヤンカン (yang gang)	38	116	烏龍・革就 ケージユ (gejiu)
4	改就 ガイジュウ (gai jiu)	30	111	哀牛 アイニユウ (ainiu)
5	羊牛 ヤンニユウ (yang niu)	19	75	哀賒 アイセイ (aise)

〔出所〕現地での聞き取りより作成

利用している湧水などから、党革・歹外・羊岡、改就、羊牛の合計3集落より構成されていたと推察できる。

加勉郷では1953年に土地改革が実施された。当時別鳩村の戸数は82戸、人口は621人であった¹⁸⁾。ミャオ語では、別鳩を「チア・ミイエ」(qia mie)という¹⁹⁾。別鳩村に関しては、「チア・ミエイ」(qia mei)と呼ばれることが多い。その理由は、周辺にミャオ語で「ダイ・ミエイ」(dai mei)と称されている柿の木が多いためであるという。

当村の住民は、王・韋²⁰⁾・蒙・梁のいずれかの姓に所属している²¹⁾。その内、王・韋・梁の3姓は、ミャオ族²²⁾であるが、蒙姓は本来チワン族で、同県平正郷から移動してきたが、移住して長期にわたるのでミャオ族に同化している。当村に移住してきたミャオ族は、古老の話によると、別鳩村下寨（現在の羊大村下寨）の龍姓を名乗る一族がもっとも早く、從江県擁里郷龍江から移動してきたという。別鳩村の韋姓も龍姓と同一の祖先であった。しかし、その後の人口増加に伴い、一般に「破姓開親」と称されている改姓を行ない、韋姓を名乗ることになったという²³⁾。

上述のように土地改革は1953年に実施された

が、それまでは当村には地主などの富裕階層をはじめ、種々の階層に所属する住民がいた²⁴⁾（第2表）。別鳩村の大半を占めた貧農の生活は、W・S（69歳 2人家族）の場合、以下のものであった。

当時、水田2畝（1畝は6.67アール）、山林²⁵⁾1畝を所有していた。これらの耕地からモチ米500斤（1斤は500グラム）、アワ100斤、トウモロコシ80～100斤、ヒエ40斤、サツマイモ100斤、タロイモ5斤などの作物を年間平均して収穫していた。しかしながら、年間数ヶ月分の食糧が不足するため、放牧・薪取りなどの手間仕事などをしたり、ときには麓の家々を巡回して食糧などをもらうこともあった。

1954年には加勉郷に「初級合作社」が設置され、翌年秋には「高級合作社」と発展した。その後、1958年に「加勉郷人民公社」が成立し、集団所有体制が確立した。生産責任制は別鳩村下寨が羊大村に編入された1983年に導入された。導入に際しては前年すなわち1982年の人口に応じて耕地などが個人に分配された²⁶⁾。その内容は、成人（男・女とも）1人に対して、1畝の水田、子供には0.7畝の水田が分配された。常畑は男女・老若の区別はなく、均等に各人あたり0.18畝配分した。山林に関しては、各個人

第2表 土地改革以前の農民の階層

階層 耕地	地主			富農			中農					雇農		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L ^①	M ^②	N ^③
水田	12	8	17	8	12	8	3	8	6	8	10	0	0	0.2
山林	30	20	50	8	5	4	2	3	2	3	4	0	0	2

（注）単位は畝（6.67アール）

〔出所〕現地での聞き取りにより作成

①木桶・竹細工づくりを行なう

②木桶づくりを行なう。元々は、水田1.8畝、山林1畝を所有

③狩猟、日雇い

に分けられたのではなく家ごとに2畝ずつ分配した。

なお、人民公社時代には、生産大隊の隊長、党書記などが主として村の行政を担当してきたが、その期間以外は、寨老と称される村の代表が集落の秩序の維持を行なってきた。現在でも、86歳、71歳、70歳の3寨老が存在する²⁸⁾。

別鳩村は、前述したように3つの集落から構成されている。第2図は、その内村の中心部とでも称すべき第1組党革、第2組歹外、第3組羊岡の家屋配置などを示したものである。第2図を参照しながら、別鳩村の集落の特徴を検討していくことにする。

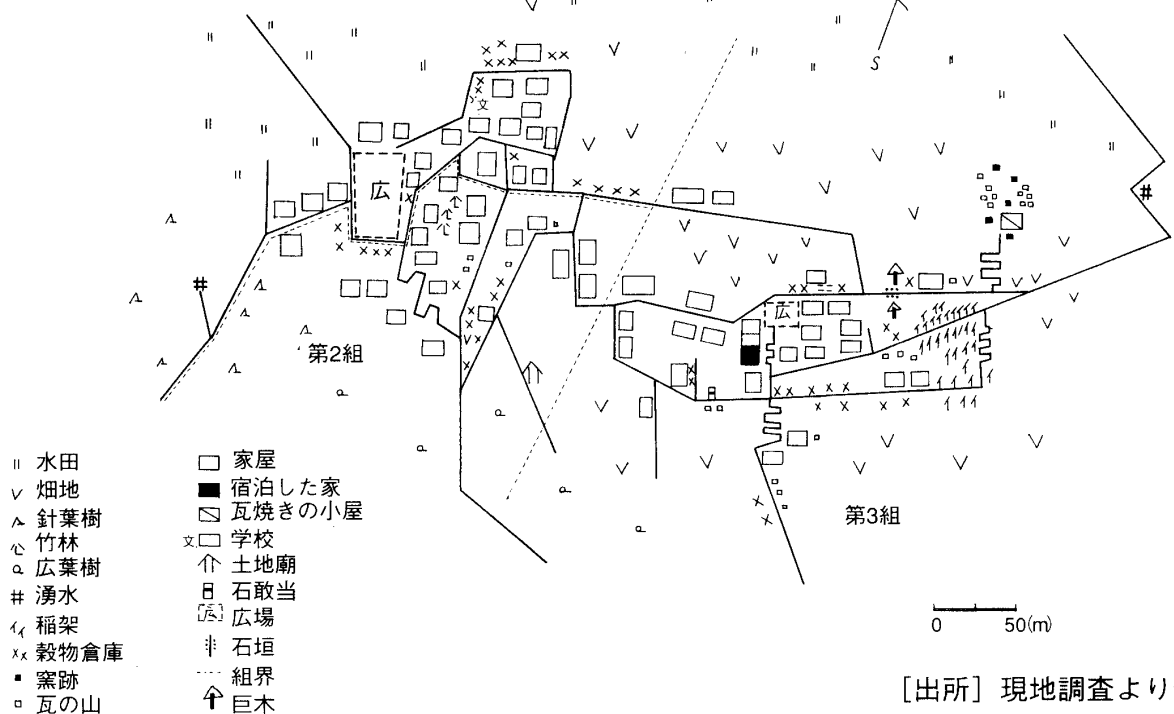
集落は、山頂部近くの山腹斜面上に位置している。集落が位置している海拔高度は870メートルである。それ故、決して高所に立地しているとはいえない。しかし、雲貴高原東部においては、相対的に西部や中部よりも平均海拔高度が低いため、東部としては比較的高所に位置していることになる。また集落は山腹の北斜面に面しているため、年間を通じて日照時間が短い。

そのため、米などに代表される農作物の収穫量は多くを期待できない²⁹⁾。

「ケージエ」を過ぎて集落がみえてくると、右手下方に瓦（レイリ「rēidǐ」）を焼く窯（ハイファレイリ「hái fa rēidǐ」）がみえる。窯は1990年につくられたものであるが、現在では既に使用していない。その理由は、別鳩村全戸分の瓦を焼き終えたからであるという。窯跡付近および集落内の各家の庭先などには、焼かれた瓦が高く積まれている。それ故、別鳩村の特色の1つに、全戸が瓦屋根の家庭となっていることがあげられるほどである。

さらに、集落中心に向かって50メートルほど進むと、道路の両側に長さ高さともに約2メートルの石垣跡がみえてくる。この石垣は寨門と称され、集落の出入口に設置されており、泥棒などの外部からの侵入者を防ぐ役割を担っていた。しかし、現在では門は消失しており、両側の石垣も崩れかかっている。そのため、夜半も自由に来往することが可能である。なお、付近のミャオ族の集落³⁰⁾においては、現在でも

第2図 別鳩村中心部



[出所] 現地調査より作成

集落の上方、第2組の端に土地廟（オインディ「oin dei」）が鎮座している。土地廟は小規模な祠で、線香・酒・献花などが供えられている。この土地廟の歴史は古く、既述したように龍姓の祖先「クチユ」がこの場所に石碑を建てたのが最初であるという伝承を有する。現在まで62代を数えるという。毎年「開春」³⁵⁾（農曆の4月末、以下暦はすべて農曆）と9月の秋季の収穫準備時³⁶⁾には、この前で土地神の祭礼が開催される。

「開春」では、1頭の雌豚を屠殺し、各戸ごとに竹筒1本に入れた米（「一筒米」）を出し合って神を祀る。9月の祭礼では、各家ごとに乾魚1匹、1筒の米を供出し、「開春」同様の祭が挙行される。なお、供出される米は両祭とも約1ヶ月前に集められ、当村で「泡酒」と呼んでいる濁酒をつくる。これらの祭祀活動は、第3組在住の鬼神³⁷⁾（「鬼師」、ガーソン「gá sǒng」）によって主宰される。

他に、集落内に入ると至るところに、主として収穫した籾などを収納・保管する穀物倉庫および刈り取った稲を天日干しする稲架が存在するのが目につく。前者は、全戸が所有し、それぞれ収穫した穀物を収納している。後者は、道路沿いに建られ、長方形の大きな木枠の中にはしご状に10本ぐらいの太い竹を等間隔において横に通したものである。この木枠1つを1排と呼び、数軒で共同して使用している。

以上、第2図を参照しながら、集落中央部のとくに目立った特徴を列挙してきた。再度第2図全体を俯瞰すると、調査期間が短くて詳細に解明できなかったが、湧水・広場など住民にとって貴重な場所の配置を考えると、他のミャオ族の集落³⁸⁾と同様、集落は、第1組党革・第2組歹外と第3組羊岡の2つに分かれているような印象をもつ。すなわち、外観上だけであるが、集落を2分する双分制(dual organization)の原理

が働いているのではないか、と思われる。この点に関しては、問題点の指摘のみにとどめ、今後の研究課題としたい。

註

- 1) 中国国内だけでも約740万人の人口を擁している（1990年）。
- 2) 例えば、ベトナム北部、タイ北部など。これらインドシナ半島北部の山岳地帯に居住するミャオ族は、一般にメオ(Meo)族と呼ばれることが多い。これらの地域に分布するミャオ族など少数民族に関しては、以下の書物が詳しい。

Lemoine, J.(1972)《Un Village Hmong Vert du Haut Laos》Editions du Centre Nationale de la Recherche Scientifique, Paris

- 3) 例えば、鈴木正崇・金丸良子（1985）『西南中国の少数民族—貴州省苗族民俗誌—』古今書院
萩原秀三郎（1987）『稲を伝えた民族—苗族と江南の民族文化—』雄山閣

坪井洋文編（1987）『華南畑作村落の社会と文化—貴州省西北地区の少数民族を訪ねて』国立歴史民俗博物館

田畑久夫・金丸良子（1989）『中国雲貴高原の少数民族 ミャオ族・トン族』白帝社など。

- 4) 照葉樹林文化論と称されている文化論などが代表。照葉樹林文化論に関しては、以下の拙論を参照されたい。

田畑久夫（1990）「照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態」兵庫地理35 pp.43～58

田畑久夫（1991～1993）「照葉樹林文化論の背景とその展開（1）～（3）」兵庫地理36 pp.25～35, 同37 pp.28～42, 同38 pp.12～29, など。

- 5) 前掲3)田畑久夫・金丸良子（1989）

田畑久夫・金丸良子（1993）「ミャオ族の生業形態の研究—フィールドサーヴェイを中心として—」比較民俗研究7 pp.97～151

田畑久夫・金丸良子 (1995)『中国少数民族誌・雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房

- 6) 数年来、「未開放地区」についても開放される地区が増加してきた。しかし、開放されたといっても外国人が自由に長期滞在して調査することは、まず不可能である。

- 7) 竹村卓二 (1981)『ヤオ族の歴史と文化 華南・東南アジア山地民社会の社会人類学的研究』弘文堂

- 8) 勿論、ミャオ族は雲貴高原を中心に各地において、呉八月に指揮された大反乱 (1795～1806年)、張秀眉が指導し、太平天国軍と協力した反乱 (1855～1872年) などに起こした。しかしながら、これらの反乱はすべて失敗に終わった。

貴州省民族研究所編 (1980)『貴州的少数民族』貴州人民出版社 pp.2～4 など。

- 9) 例えば、中国では「モン」(mong)と称されることが多いが、インドシナ半島北部では「ムー」(mhu)などと呼ばれている。

村松一弥 (1973)『中国の少数民族—その歴史と文化および現況—』毎日新聞社 pp.205～209

- 10) 例えば、盤朝月 (1988)「瑤族支系及其分布殘談」貴州民族研究第 I 期 pp.91～95 など。

- 11) 明時代に書かれた『黔苗図説』、清時代に成立した『皇清職貢図』などの漢籍史料による区分が代表的である。鳥居龍藏も以下の著書の中で、主として女性の衣服によって紅ミャオ、青ミャオ、白ミャオ、黒ミャオ、花ミャオの合計5分類を行なった。

鳥居龍藏 (1907)『苗族調査報告』東京帝國大學理科大学人類學教室 鳥居龍藏 (1976)『鳥居龍藏全集 第11巻』朝日新聞社 pp.1～280所収。

- 12) 例えば、本稿の調査したミャオ族が居住する地域に関しては、内部発行の資料には調査報告が記載されているが、公開された研究書・論文に

おいては詳細な field survey に基づく調査報告は発表されていない。なお、ミャオ族の移住史を中心とした歴史、民族衣装による分類などミャオ族の概要に関しては以下の拙論で紹介したことがあるので参照されたい。

田畑久夫 (1994)「中国雲貴高原の自然と住民 (9)・(10)—山棲みの少数民族を事例として—」学苑 (昭和女子大学) 655 pp.85～94, 同 656 pp.38～40 など。

- 13) 同様の区分は、以下の拙著などでも行なっている。

前掲3)田畑久夫・金丸良子 (1989)pp.131～133

- 14)「平地ミャオ」族。「高坡ミャオ」族という名称は、現地の人々の間でも使用されている。

- 15) 別鳩村は1983年まで上寨・下寨の2集落より構成されていた。しかし、同年下寨は隣接する羊大村に編入され、以降羊大村下寨と称されることになった。集落の起源としては、下寨の方が古いとされる。上寨すなわち現在の別鳩村が下寨と分離したのは今から250年ぐらい前で、11代経過しているという。なお、調査は1995年3月中旬から下旬にかけて実施した。同行者は、麗澤大学外国学部助教授金丸良子 (中国民俗学専攻) および麗澤大学外国学部学生の合計3名であった。

- 16) 後述するように、集落が成立した当初、チワン族も居住していた。しかし、結婚などによりすべてミャオ族に同化した。

- 17) 人民共和国成立以前は、当村では組に代わるものとして「保甲制」が敷かれていた。これが現在の集落 (わが国でいう大字) に相当する。

- 18) 別鳩村上寨・下寨の合計

- 19) 古老の話ではより正確には「チア・ミイエ」とは村名ではなく、付近一帯の地名の総称であった。当時「チア・ミイエ」には5つの集落が存在したという。

- 20) 戸数が多いため、大章と小章に分かれる。

- 21) 戸数は王姓（22戸）、韋姓（小韋55戸、大韋27戸）、梁姓（13戸）、蒙姓（6戸）である。
- 22) 当地のミャオ族は、「ドンマイ」(donmai)と自称している。地元の研究者の間では「花ミャオ」族に分類されている。
- 23) 龍姓の祖先である「クチユ」(Qùqiù)が当地に定住してから、何人かの子供を設け、それぞれに幼名（小名）付けたが、これらの幼名が姓となった。韋も、王・蒙などの姓と同様にその幼名から起こった。ただし、王姓については王家に別の伝承が伝わっている。すなわち、祖先は榕江県方仙あるいは方差（現在の車江）から移ってきて62代目であるという。
- 24) 地主（3戸）、富農（3戸）、中農（5戸）、雇農（4戸）の他はすべて貧農であった。これらの区分は主として水用などの耕地の有無などにより決められていた。すなわち、水田、山林などの土地を大規模に所有し、他人に貸している地主、耕地を所有している富農・中農・貧農、耕地などをまったく所有していない雇農の5階層に区分されていた。富農・中農・貧農の区別は、所有している水田や山林などの大小によった。
- 25) 当村でいう山林とは植林を行なう山地ではなく、トウモロコシ・アワ・ヒエなどを植えるために拓いた土地のことである。いわゆる「山畑」である。
- 26) 同年に「分田到戸」の政策が開始された。
- 27) 本来ならその後も人口の増減などにより再分配する必要があるが、現在までその後の再分配は行なわれていない。なお、その他、主要な農具、家畜なども分配したが、その詳細は不明であった。
- 28) 寨老は住民によって推挙され選ばれる。3人の寨老を努めていた。当時別鳩村には5人の寨老がいたが、他の2人は現在既に他界している。なお、現在別鳩村には幹部として村長・会計、

党書記の3名がおり、村民委員会を構成し行政面を担当している。しかし、同委員会の事務所は1973年に発生した集落全域を覆う火災に会い、存在しない。

- 29) 湧水の量は飲料水として使用する程度でしかない。そのため、農業用水は天水に依存しているといった状態である。かかる点からも毎年のように水不足になっている。このことも、農作物の収穫量が少ない原因となっている。
- 30) 例えば、從江県谷洞郷銀鑾村山崗寨など。
- 31) しかしながら、第2図に示した寨門跡の巨木のうち1本は雷落にあったためか、幹が途中で折れている。これらの巨木を含む寨門付近の樹木は、村の集団所有（「風景樹」と称している）となっており、住民といえども勝手に伐採することができない。
- 32) と同時に、別鳩村周辺の山地は河谷から山頂付近まで棚田となっており、杉などの植林はほとんどみられない。この点は、周辺一帯の人口圧の高さを示すものといえよう。そのため、杉皮などが極端に利用しにくい、ということも考えられる。現在では、他のミャオ族の集落と大いに異なり、食事のための煮炊き用の燃料にも困っているような状態である。
- 33) 中国では2学期制である。入学は9月である。
- 34) 1992年より、同郷においては就学適齢期の児童がいない家庭をも含む全戸に対して、教育負担金を徴収している。そのため、「公辦教師」の給与は飛躍的に増加し、月額300～400元となっている。この金額は、北京・上海などの大都市の新規大卒者の月給とほぼ同額である。これに対して、「民辦教師」の方は従来どおりで、月額約60元ほどの給与と米を毎月数10斤もらっている。その他、前者は移動が自由な「都市戸籍」、後者は居住地が限定される「農民戸籍」であるなど、両者間の差は著しい。
- 35) ミャオ語では「シィオチンダチンデェベェニィ

ウ」(xio qin da qin de be niu)という。その意味は、天候が順調で雨が多く降りますように、五穀が豊かに実りますようにという意味である。

36) ミャオ語では「開春」と同じである。この祭祀の目的は、穀物はすべて熟しました。まずご先祖様が先に食べて下さい。その後、我々が食べましょうということであるとされる。同様の儀式は「喫新節」にもみられるが、この祭祀は集落の全戸が共同で行なう点が異なる。9月9日から15日の間に実施されることが多い。

37) 鬼神は、祖宗の歴史、物事の順序を理解し、寨老などの村の有力者の承認を受けて、受け継がれる。しかし、他のミャオ族の集落で見られるようなシャーマンとしての性格は少ないように思われた。

38) 例えば、下記の拙論で紹介した従江县加鳩郷加鳩村党下寨など。

田畑久夫（1994）「中国雲貴高原の自然と住民（11）―山棲みの少数民族を事例として―」学苑（昭和女子大学）660 pp.83～86など。